



ふるさととは水の星
森下一仁
集英社 (文庫)
(4/15刊・¥240)

全面のほとんどが水圏である惑星アクエラ
ンに、取材旅行に訪れた、主人公のカメラマ
ン、ノグチとイサムは、老人と二人きりで住
む、少女レニと出会う。やがて、レニは地球
で、スペース・バブルのスターになる。
しかし、彼女の生い立ちには、大きな秘密が
隠されていたのだ。

著者の処女長篇。「コスモス・ホテル」以
後の、新しい展開といえる。雲の広がるアク
エランの海は、母胎の、生命の海を思わせ
る。冬のさなか、あたたかな海を思い描きな
がら、書いたという、作者のイノリジが実っ
ているようだ。ただ、今回の長篇は、少し短
すぎたような気がする。イサムの出番がいま
ひとつで、途中に入るレニの独白に、生彩が
ないからだ。登場人物を、切り詰めてもよか
ったかも知れない。躍動美に満ちた、アクエ
ランの海そのものであるレニというキャラク
ターはいいのだ。もっと生かせたのではない
だろうか。

結末のハッピーエンドは、不思議と似合っ
ている。安易なようでいて、伏線がある。や
はり、本篇は、こう終らなくてはいけない。
それが著者の味というものだろう。